

# 巻 頭 言

人口知能 (AI ; artificial intelligence) 技術を使って野生のチンパンジーの個体識別を行う研究方法が京大霊長研らによって開発され、2019年9/5付けで米科学誌に掲載されたと報じられた。AIによる個体識別の正解率は92.5%であったのに対し、人では20～42%であったという。熟練した研究者の経験値に負うことが多かった解析手法が、より客観的にしかも圧倒的なスピードで行うことができる方法に転換され、フィールドワークに新たな方向性が示された。サイエンスにおける先進的な研究技術の開発と導入、それに伴う研究進展のスピードや得られる成果のインパクトは今日特に目覚ましい。一方、分野は異なるが、この対局に位置するような研究の話題を同年9/17付新聞記事で目にした。福井のアマチュア天文家が65年間にわたって火星を天体望遠鏡で「眼視観測」し続けた。天文家の死後その観測画像のスケッチ数万枚が、火星観測で有名な米国の天文台に收藏されることになったという。その半世紀にもわたる継続的な記録は、貴重な資料として今後活用されるのだそうだ。最近遭遇した、ある意味両極端のサイエンスに纏わる報道に、研究技術と研究者スピリットについてあらためて考えさせられた。

筆者自身の研究分野のキーワードは神経解剖・組織学で表現される領域である。細胞～組織レベルで対象物を様々な技術を駆使して顕微鏡下で可視化し解析する、いわゆる「形態屋」である。そして解析技術ありき、の研究分野でもある。研究をスタートさせるには、まず必要な技術(機器操作も含めて)を自ら習得しなければならない。大学院時代には先輩の院生たちから、助手時代には所属講座の准教授や教授たちから、論文作成はもちろん、研究技術そのものについても手取り足取り指導を受けてきた。必要な技術の指導者が身近にいない時には、また新規の技術が欲しい時には、他大学や研究所などにも技術習得に出かけた。若手の研究者は技術の習得に最も貪欲であった。今年の7月に参加した日本神経科学学会では、多重蛍光免疫染色法を用いて様々な分子マーカーを組織切片上で検出することなどは、学部生レベルでもルーティンワークと化していた。遺伝子改変実験動物の作出や使用は当たり前、ターゲット分子に蛍光物質を組み込んだマウスを使えば、染色作業なしでも組織切片上で対象を可視化できる。トレンドのFIB/SEMトモグラフィ法では、自動化された超薄切片作成装置と電子顕微鏡を合体させ、組織の三次元構築が微細構造レベルで可能になった。新規の解析技術を享受した若手研究者たちの魅力あふれる演題に触れ、未だ研究者の末席を汚す筆者も大いに刺激を受けた。

学会で久しぶりに古巣の研究文化を思い起こし、次世代の活躍を目の当たりにした後、さて保健福祉学部の研究文化はどのように育まれているのか、と考えてみる。教育重視の大学とは言え、教員評価には論文発表や研究費獲得の実績などのウエイトは小さくない。一方で、講座制はなく、教員は教育の専門領域グループでゆるく括られているに過ぎない。このような中で特に若手教員の研究力を組織的に育てる仕組みは果たしてあるのか？臨床の現場を経験した若手のプロパーたちが、新たに教員として保健福祉学部に所属するようになる(すでに所属している)。彼らが研究力も備えた大学教員として学部の確実な戦力に育つためには、筆者も含めた先輩教員(研究者)たちには何ができるか。保健福祉短大から四大化を経てすでに四半世紀経った今、待ったなしで考えなければならない時に来ている。

県立広島大学 保健福祉学部  
津 森 登志子